

TEXT/HIROMI KANAMARU
ILLUSTRATION/TOSHIKO EHARA



人生を強烈に映したテイナのヘアスタイル

ロックの祭典のドキュメンタリー『ウッドストック』（1970年）の翌年に公開されたのが、アフリカのガーナ建国を祝って開催された音楽祭のフィルム『Souleto Souleto』魂の詩』（1971年）だった。

このときに初めてアイク・アンド・テイナ・ターナーを知った。とりわけテイナ・ターナーが網のようなスケスケの短いワンピース姿で腰をくねらせながら激しく歌うさまは強烈で、まだ、高校生だった僕をおおいに刺激した。この頃は、アイク・アンド・テイナ・ターナーの、一つの絶頂期だったのだろう。

テイナ・ターナーはソロとして独立し、再出発したシンガーだが、1990年に（51歳）『What's love got to do with it?』で、グラミー賞を受賞し、自身の力によって、再びかつてのような栄光を勝ち得たのは記憶に新しい。映画『テイナ』は、テイナ・ターナー自身の自伝に基づいたストーリー。幼少時代に始まり、デビュー、家庭内暴力の日々と離婚、ソロ・シンガーとしての復活を描いたものである。それにしても、現役バリバリの51歳というテイナの、いわば自伝映画が作られてしまったのだから、凄い。いかに人気があるかというものでしょう。

この映画で初めて知ったことは、最高最愛の夫婦コンビで売っていたアイク・アンド・テイナ・ターナーの実体が、実は夫の暴力とコカイン中毒に妻のテイナが終始脅え、歌だけが救いだったという事実である。愛に満たされていたのは、結婚までのわずかの時代。救われない彼女の心を支えたのは、歌と仏教である。ハスは泥沼に育ち、泥沼が深ければ深いほど美しい花を咲かす」とは、映画のイントロダクションの言葉だ。

スクリーンの中では、ストーリーの節目に合わせて、彼女のヘアスタイルもドラマチックに変化していく。しかも、彼女の歌う曲が、

そのときどきの彼女の心境を見事に言い表すように出来ていて、面白い。つまり、歌とヘアスタイルとドラマが密接に結びついて語られるのである。これほど変化が激しいものも少ないかも知れない。ヘアスタイルもおそらく20種類くらいは出てくる。とりわけ、夫婦仲に亀裂を生じた時代には、彼女の内面の葛藤を表すかのように非常に顕著に出てくる。それだけで物語が出来てしまうほどだ。

テイナ・ターナーこと、アンナ・メイ（アンジェラ・バゼット）は1939年、テネシー州のナットブッシュ生まれ。映画は幼少の頃教会でゴスペルを歌うシーンで始まるのだが、彼女のヘアは、フロントと両サイドの三つのブロックに分けた三つ編み。これがオシャレでかわいい。もっとも彼女の母は、幼いアンナを置き去りにし、彼女の姉のアイリーンだけを連れてセントルイスに出てしまう。夫の暴力に耐えられなかったからだ。したがってアンナは祖母の手で育てられる。

アンナは19歳のとき、1958年に母と姉を慕ってセントルイスに行く。そのときは初々しい女の子らしく、髪を後ろにギョッとまとめて細い水色のリボン巻き、フロントには軽いカールをしたスタイル。姉に連れられ、姉の勤めるクラブに行くことになるのだが、このクラブの人気者がアイク・ターナー（ロレンス・フィッシュバーン）のバンドである。ここで彼女は飛び入りで歌い、観客はもちろん、アイクにも絶賛される。舞い上がった彼女はアイクに恋をする。このときから、アンナのヘアスタイルは急激に変化していくのだ。

家ではピンカールをしてサイドに赤い花を一輪。一人で鏡の前で歌い出すほどの喜びよう。やがてクラブに行くときは、髪をとかし、赤いルージュを引き、イヤリングをつけて、すっきりレディの雰囲気だ。お店の女の子に「もう大人のつもり？」とからかわれる。ライブハウスの帰り、アンナはアイクにデ

はらだ玄の マインド、 愛。



7月生募集中

- システムコース
1・4・7・10月開校
- スペシャルセミナー
● 名古屋ANNEX(名古屋校)
● 郡山ANNEX(郡山校)
● サロンレッスン(臨店)
● フライベイトレッスン
- 3日間短期集中
メイクアップセミナー
夏(7・8・9月)開催

GEN
HARADA
MAKE-UP

はらだ玄メイクアップアカデミー
お問い合わせ 03-3475-0609

「TINA ティナ」
(TINA...What's love got to do with it?)
1993年/アメリカ
監督：ブライアン・ギブソン
出演：アンジェラ・バセット、ローレンス・フィッシュバーン、パネ
ツサ・バル、キャロウェイ、ジェニファー・ルイス
配給：フエナ・ピスタ

イナーに誘われ、口説かれる。
「その小さな身体からあのかい声。客もノリまくった。女の子なのに男のようなパワーだ。どこから見ても女。だが歌にかけては独特のスタイルがある。レコードを売るのは、そういう個性だ。生まれつきの才能がある」
「ティナ」と名前を変えた彼女は、こうしてアイクのボーカリストとしてデビューする。最初のリハーサルでは、すっかりヘアスタイルが変わり、外巻きのカール。何だか、彼女の心の広がりも表れているかのようだ。「神よお力を、素敵な女に、あなたの力を。私を美しい女に」と、ティナは歌う。
こうして最初のツアーが始まる。着いた町で、アイクがティナに言うのは、ヘアスタイルを変えろということだった。
「マリリン・モンローみたいな金髪にするんだ。あの看板みたいに」
見ると劇場の横に、ソフトクリームか何かの女の子がいるのだ。そこでティナとコーラスの3人は、初めての町で美容室に入ることになる。ティナは金髪にブリーチをするのだが、施術をした子が失敗。彼女の髪はすっかり根元から抜けてしまう。大騒ぎだ。
いよいよライブ。しかし、音楽が始まっても

ティナもコーラスも舞台上に現れない。しばらくして飛び出すように出てきた4人は、何と全員同じ腰まであるような栗色のロングヘア。このスタイルがおおいにウケる。
楽屋に戻るとアイクが、凄じ剣幕でやってくる。
「ウィッグは誰の思いつきだ。俺にひとことも言わずに。気に入った。ウィッグでいこう!」
こうして、ウィッグでルックスを変化させていくという一つのスタイルが確立される。彼女たちは一躍注目を浴びることになるのだ。
順風満帆のツアーも束の間、ティナは妊娠して子供を産む。疲れ切った彼女のヘアは、ステージとは違って変わった、まるで坊主のようなショートヘア。そこに彼女の未来がうまく予感されているよう。出産の休暇も与えられずツアーに駆り出され、メキシコでアイクとティナは正式に結婚。彼女のヘアはセミロングの外巻き、愛らしい。
彼女は歌う。
「結婚のプランを立てたの。あなたの愛が少しでも本物なら。せめて私の半分でも。ダーリン。今度こそ幸福になれる予感がするの。私にはわかる。今度こそ幸福に。私はわかる」
だが、彼女の願いは、仕事を重ねるうちに、どんどん裏切られていく。仕事の上ではおし

どり夫婦。しかし実際はコカイン中毒の夫の暴力の恐怖にさいなまれる日常。解放されるのは、激しいソウルフルな舞台だけ。ツアーの模様が次々と映し出されるが、彼女の不安な精神を反映するかのようには、ボリュウムのあるポップから、さまざまな長さのストレート、ワイルドなタッチのブロードと、次々にヘアスタイルが変化していく。
そんな中で、かつてのコーラスの友人ジャッキーに仏教をすすめられ、信仰心から次第に自分自身を確立していく。あるツアーの最中に、アイクに激しく殴られたティナは、たった38セントを握りしめ脱出。そしてアイクとの正式離婚を勝ち取り、ソロ・デビューを果たすのである。
再デビューは1980年、サンフランシスコのフェアモントホテルで。ヘアは栗色のセミロングである。その後、リッツ劇場でコンサート。ここではガラリと変わったブロードのアフロヘアで、以前とはまったくスタイルが変化している。
スクリーンには、最後にティナ本人が登場するのだが、このときの彼女はブロードにメッシュしたヘアで、実にカッコイイ。ヘアスタイルも、自分自身の生活と自信から生まれたものは素敵だと思わされたものだ。

*金丸さん執筆の「こんなシーンでウエディングベル。がベネッセコーポレーションより発売されました。50本の映画からとっておきのウエディングが、素敵なイラストと一緒に紹介されています。ぜひ、一読を!